
君は僕に似ている

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君は僕に似ている

【Nコード】

N7139Q

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ユーゴ内戦。その中でクロアチア人の俺は同じクロアチア人のあいつと会った。家族をセルビア人に殺され憎しみのまま戦うそいつは昔の俺そっくりだった。あるアニメのEDの曲からヒントを得た作品です。

第一章

君は僕に似ている

見るとだ。同じだった。

俺はそいつを見てだ。すぐに思った。

そいつはがむしゃらだった。とにかく戦場に出て銃を握ってた。

「死ね！全員死んじまえ！」

叫びながら敵を撃ってた。殺しまくっていた。

セルビアの奴等を殺しまくっていた。そうしていた。

そいつと話をしてみた。歳はだ。

俺より三つ下だった。黒髪に黒い目でだ。気の強い顔をしていた。

その黒い髪と目も俺と同じだった。俺もどちらも黒い色をしている。

けれど同じなのは。その目にあるものだった。

黒い目には赤いものがあった。憎しみだった。それがいつも燃え

ていた。

俺達はアジトにしているビルの中でだ。コーヒーを飲みながら話

した。それでそいつの話を聞いた。

「セルビアの奴等の砲撃で」

「家族がやられたんだな」

「はい、そうです」

こうだ。俺に話してくれた。

「父さんも母さんも妹も」

「皆なんだな」

「俺のいた村にセルビアの奴等が来て」

それでだと話してくれた。今じゃよくある話だ。

俺達の国のクロアチアはユーゴスラビアから独立した。それを許

さないユーゴスラビア、セルビアの奴等がだ。俺達に攻撃を仕掛け

てきた。

俺の母親はその時にセルビアの奴等に殺された。ベオグラードに

いたが家族で逃げる時にだ。俺達の乗っていた車が撃たれた。

その銃弾が母親に当たってだ。車の中で血まみれになって死んだ。俺はそれからセルビアの奴等を怨んでだ。こうして戦っている。

それが三年前で今じゃ立派な軍人だ。それが今の俺だ。

そして目の前にいるこいつも。同じ理由で戦っていた。

「砲撃で三人共吹き飛ばされました」

「そうだったんだな」

「俺だけは助かりましたけれど」

顔を俯けさせての言葉だった。

「けれど。何もかもなくなっ」

「兵隊になっただんだな」

「はい」

その通りだった。まさにだ。

「俺の家族を殺したセルビアの奴等を全員」

「殺すか」

「はい、そうしてやります」

冷たいコンクリートの中でだ。その熱い、それでも暗い言葉が響いた。

「それは皆ですよな」

「そうだな」

その通りだった。俺もそうだった。今のクロアチアは皆セルビアへの憎しみの中にある。向こうもそうだろうが俺達はそうだった。

その憎しみを感じながらだ。俺は答えた。

「皆だな」

「セルビアの奴等、絶対に」

憎しみの言葉がまた出た。目の前にいるそいつの口から。

「許さない、目についたら片っ端から殺してやりますよ」

「そうだな」

俺は言葉は応えた。けれどだった。

これまで確かにセルビアの奴等が憎かった。俺自身何人も殺して

きた。しかしだった。

最近何か違ってきた。空しい。殺すことばかり考えてきた。憎くて仕方がなかった。けれどそれがだ。何かが違ってきていた。殺し合ってもだ。何にもならないんじゃないかって思えてきた。それだった。

目の前のこいつを見た。するとだ。

鏡を見ているような気がした。少し前までの俺が映っている様な。その俺を見てだ。俺は言った。

「何を目指してるんだ？御前は」

「俺ですか」

「ああ。クロアチアが完全に独立したらな」

どうなるのか。それを尋ねた。

「何が欲しいだ？それで」

「平和に決まってるじゃないですか」

返答はこれだった。俺の予想通りだった。

「それですよ」

「平和か」

「はい、セルビアの奴等を皆殺しにして」

こう言うのもわかっていた。実は。

「それで平和をです」

「そうか、わかった」

俺はその言葉を受けた。

「戦いのない世界が欲しいんだな」

「それ以上に幸せな世界なんてないですよね」

今度は希望に溢れる目になっていた。これまでの憎しみが少しだけ薄らいで。その目になって俺に話してきた。

「平和だったら。父さんも母さんも」

「妹さんもだな」

「死ななかつたですし」

だからだというのだった。

「だから俺は」

「平和か」

俺はその言葉をまた口にした。

第二章

「いいものだよな。とてもな」

「はい、また平和になつて欲しいです」

「けれどその為には」

「セルビアの奴等が邪魔です」

こう言うのもわかっていた。目に憎しみが戻るのもだ。それも全部わかつていた。

「あいつ等が」

「そうだな」

答えはした。けれど。

心は違っていた。これまでは頷けた。今は違っていた。

だから言葉だけで答えてだ。また話を聞いた。

「俺、戦います」

「平和を手に入れる為にだな」

「そうします。クロアチアの為に」

平和が欲しい、そしてクロアチアを愛している。それは俺も同じだ。変わる筈がなかった。けれど戦争と憎しみにだ。俺は正直疲れだした。

そして疲れを感じてから。俺の考えが変わった。

こんなことを繰り返して。先に何があるのか。

クロアチアの前はユーゴスラビアの中にあつた。ユーゴは。

五つの民族が仲良く暮らしていることになつていた。少なくともそれを目指していた。けれどそのユーゴができる前はどうかだったか。殺し合っていた。セルビアもクロアチアも。それこそスロバニアもマケドニアもだ。お互いに憎しみ合つて殺し合つてきた。それがバルカン半島だった。

この半島に血が流れなかったことはない。俺はそのこともあらためて考えるようになった。そうして俺は。殺し合つてその先にある

ものを考えた。

同じだと思った。繰り返したと。

殺し合って憎しみ合って。それがずっと続く。ユーゴの前の歴史がだ。今繰り返されているだけだった。その繰り返したと思った。それを言いたかった。しかし。

また。予想通りの言葉が出て来た。こいつの、彼の口から。

「俺、戦いますから」

「クロアチア人としてだな」

「はい、セルビアと戦います」

その心は変わらなかった。思った通りだ。

「あの時の俺は何もできなかった」

「だから家族が死んだっていうんだな」

「けれど今は違います。俺は戦います」

こつだ。熱のある声で話してきた。

「そうしますから。絶対に」

「わかった」

俺は表情を消してその言葉に頷いた。そしてだった。

その日は休んだ。自分達の粗末なベッドに入って寝た。明日もまた戦いだ。それがずっと続いた。俺達は生きてはいた。けれどだった。

戦いが続く。ユーゴだった国はどんどん分裂していつていた。

俺達だけでなくボスニアでも既に戦いがはじまって久しかった。

そこにマケドニアやコソボも独立を言い出してだ。さらに滅茶苦茶になっていた。

特にだ。ボスニアは酷かった。俺達は倒したセルビアの連中を見下ろしていた。また戦いだった。セルビア軍の陣地を奇襲して勝った。

セルビアの奴等は逃げ出した。後には死体と負傷者が残っていた。負傷者は捕虜にする予定だ。けれど彼はその捕虜をだ。

一人残らず射殺した。誰もそれを止めなかった。俺もだ。

止めようとは思った。けれどあの話を聞いて。それができなかった。

彼はだ。怒りに満ちた声でこう言った。

「この連中ボスニアでとんでもないことしてるんですね」

「ああ、そうだ」

その通りだとだ。俺はセルビア人の死体を見ながら言った。頭を撃ち抜かれてだ。口から血を流してそのうえで倒れていた。その死体を見下ろしながらだ。

「ここ以上に虐殺してな」

「収容所ですね」

「とんでもない話だ」

正直考えたくもなかった。言葉に出すのもはばかれた。

「そんな目的での収容所なんてな」

「それがセルビアのやり方なんですね」

俺に応える声にだ。これまで以上に憎悪がこもっていた。

「そんなことをするのが」

「御前はそういうことは」

「絶対にしません」

少なくともそういう奴じゃない。それはわかっていた。

けれど言葉になったのを聞いてだ。俺は安心した。そこまで荒んでいないことがわかったからだ。

「そんなことは」

「そうだな。俺もだ」

「俺はセルビアの奴等を殺します」

それは変わらないというのだ。

「けれど。そんなことは」

「けれどな。それはな」

「昔から行われていたんですか」

「そうだ、昔からだ」

実際にそうだとだ。俺は答えた。調べてだ。それもわかっていた。

第三章

「御互いにやってきたんだ」

「クロアチアもですか？」

「信じるか？この話は」

彼の顔を見た。黒い目が赤く光っている様に見えた。憎しみの光だった。

「どうだ、それは」

「信じたくありません」

これが彼の返答だった。まだ敵がいなか周囲を見回しながら言った。

「クロアチアがそんなことをしていたなんて」

「今もかもな」

俺はふと言った。

「俺達はセルビアと同じことをしているのかもな」

「同じこと？」

「ああ、ひよっとしたらな」

ある程度確信していた。けれど俺はあえてこう言った。

「そうじゃないか」

「そんな筈ないですよ」

この返答もだ。来ると思っていた。

「クロアチアはそんなことはしませんよ」

「そうか」

「そうですね。絶対に」

俺もそう思っていた。前は。だからわかった。

それでだ。今の彼の言葉を聞いてだ。俺は妙に納得した。けれど納得してもだ。全く嬉しくなかった。悲しさを感じていてもだ。

「それは有り得ませんよ」

「そうだな」

「そうですよ」

微笑んでだ。俺に答えてくれた。

「それよりもここで勝って」

「ああ」

「クロアチアに優勢になってきたでしょうか」

「俺達の戦いは終わるかもな」

俺達の。あくまで俺達の戦いはだ。

「それはな」

「じゃあクロアチアはこのまま」

「独立は勝ち取れるな」

「はい、絶対に」

彼の声がつわずつっていた。喜んでるのがわかる。

「独立できて平和な国になるんですよ」

「平和か」

「これ以上に無い幸せな世界になるんですね」

「そうだな」

俺は目を伏せさせた。そうして答えた。

「きつとな」

「なりますよ、これから」

彼はそれを夢見ていた。その憎悪に燃える赤い目で。その目も俺の目だった。昔の俺の目がそこにあった。はつきりと。

戦いは終わった。クロアチアは独立できた。

けれどユーゴだった国はあちこちで戦乱が止まなかった。どうしようもない混沌としていて陰惨な状況が続いてだ。セルビアも遂に全てを捨てた。

モンテネグロとも分かれユーゴは完全に消滅した。セルビアの独裁者は去り戦争は終わった。とりあえずは終わった。

彼はそのことを心から喜んでた。テレビ、もう今にも壊れそうになっているそれでニュースを見ながらだ。小躍りをしていた。

そしてだ。こう言うのだった。

「セルビアの奴等、塞ぎこんでますよね」

「そうだろうな」

俺も同じニュースを見ていた。そのうえでの言葉だった。

「それはな」

「ええ。けれど」

「けれどか」

「俺は絶対に許さないですから」

こう言うのだった。ここで。

「セルビアの奴等は」

「じゃあこれからか」

「この国にもセルビアの奴等はまだ残ってますよね」

「ああ」

その通りだった。ユーゴだったこの辺りはただ多くの民族がいるだけじゃない。それぞれが入り組んで住んでいる。だからクロアチアにもセルビア人が住んでいる。ユーゴの時代に結婚した人達もいる。

「そうだな。かなりな」

「その連中も全員追い出して」

「追い出すか」

「歯向かうんなら殺してやりますよ」

右手を拳にしての言葉だった。

「セルビア人なら」

「そうするんだな」

「はい、そうします」

こう俺に答えてきた。

第四章

「あいつ等だけは」

「わかった」

俺は声の高さを落として答えた。

「そうして平和を手に入れるんだな」

「セルビア人がいなかったら平和になるんですよ」

彼の平和がだ。それになっていた。

「あいつ等がこれまでの戦争を引き起こしてきたんですから」

「セルビアが」

「そうですね。だからあいつ等を倒します」

平和を言いながらも。殺意も述べていた。

「そうしますから」

「わかった。それならな」

「はい、俺はやりますから」

また言った。俺に対して。

「これからも宜しく御願ひします」

「なあ」

俺はだ。彼の言葉が一旦止まったところで声をかけた。テレビのある部屋はそれが置かれている台の他は粗末な椅子があるだけだ。絨毯もカーテンも何もない。コンクリートの壁と床だけだ。それがたまらなく寒かった。

けれど寒いのはコンクリートのせいじゃなかった。他にあった。

それを感じながら。俺は彼に話した。

「これからな」

「これから？」

「少し。何処かに行かないか」

こうだ。声をかけた。

「何処かな。他の国にな」

「クロアチア以外の国にですか」

「イタリアにでも行かないか？」

あの国には戦争がない。だからこそその言葉だった。

「イタリアにだ。行かないか」

「どうしてなんですか？」

「いや、戦いは終わったんだ」

とりあえずはだ。言葉の外にあるその言葉は隠した。

「だからな」

「それでなんですか」

「ああ、どうだ」

また彼に言った。

「行かないか？二人で」

「そうですね。悪くないですね」

彼もだ。爽やかな笑顔になつて俺に答えてきた。

「ずっと戦いばかりでしたしね」

「やっと平和になったんだ。それだったらな」

「ええ、わかりました」

その笑顔でまた答えてくれた。

「イタリアに」

「イタリアの何処に行くかはまた考える」

それはこれからだった。そこまでは考えていなかった。

ただ彼を戦いから出したかった。それでだった。

「そうするからな」

「そうしますか」

「ああ。じゃあな」

「はい、わかりました」

とりあえずだが話は決まった。俺達はイタリアに行くことになった。

そしてだ。イタリアに旅立つ時にだ。俺は彼に問うた。

「イタリアは好きか？」

「嫌いじゃないですね」

微笑んでだ。俺に答えてきた。俺達は軍服から旅の姿になっている。思えば軍服以外の服もだ。長い間着ていなかった。本当に久しぶりだった。

「明るくて楽しい国らしいですね」

「ああ、そうだ」

「そうした国にしたいですね」

その目に希望を宿してだ。俺に言った。

「是非ね」

「そうだな。本当にな」

「じゃあ行きましょう」

俺に顔を向けて。ここでは明るい声だった。

「それじゃあ」

「ああ、イタリアにな」

こうしてだった。俺達はイタリアに旅立った。彼がそこで見つけれればいいと心から思いながら。

第五章

俺も昔はこうだった。憎しみばかりだった。けれど他のものを見られれば変わる。だから見せたかった。見てくれるかはわからないがそれでも良かった。

俺達はヴェネツィアに来た。水の都にだ。

その水の中に浮かぶ街をゴンドラで巡りながらだ。俺は彼に尋ねた。

「楽しいか？」

「はい、とても」

ここでも爽やかな笑顔だった。

「こうした場所ってクロアチアにないですからね」

「そうだな、ないな」

「けれどここにはありますね」

「ああ」

その通りだとだ。俺は答えた。

「銃声も聞こえないですし」

「全くな」

「いいですね、本当に」

暖かい顔になっていた。俺はその顔をはっきりと見た。

「こうしてずっと平和だったら」

「いいな」

「はい、そう思います」

「その為には何が必要かな」

俺はここでこう言った。

「それを考えていくか？」

「何がですか？」

「そうだ。何が必要だと思う？」

そしてだった。俺は目の前の彼が言った言葉をだ。自分で言った。

「戦いが無い、これ以上はない幸せな世界の為には」

「だからセルビアの奴等が」

「ここにはセルビア人はいないさ」

俺はここでこう言った。ここはイタリアだ。セルビア人はまずいない。少なくとも俺達の周りにはだ。クロアチア人にしても俺達だけだ。

その中でだ。俺は彼にこう言ったのだった。

「一人もな」

「一人もですか」

「セルビア人はいないんだ。じゃあどうすればいいんだ？」

彼等がいない世界をだ。話してみせてだった。

また問うてみせた。するとだ。

彼は言葉を失った。呆然となっている。そこから先は考えていなかった。むしろ全く考えられなかった。それも昔の俺と同じだった。

その昔の俺が呆然としながらだ。こう言ってきた。

「わかりません」

「わからないか」

「平和な国になりますよね」

「ああ、これからはな」

「けれど。セルビアの奴等がいないと」

彼の中ではセルビア人を殺すことこそが平和の実現だった。だからそのセルビア人がいなくなるとどうなるか。それを言ってみせた。するとだ。返答に困ってだ。言葉を失った。

黙ってしまった。俺はその彼にここでこう声をかけた。

「見つけていくか？」

「見つけていくか？」

「ああ。これからはな」

俺は自然と穏やかな笑顔になっていた。自分でもそれがわかった。そしてだ。あらためて彼に言った。

「考えて。見つけていくか」

「平和な国をですか」

「そうしていくか？俺達で」

「俺はわかりません」

当然だった。今言ったばかりだからだ。わからなくて当然だ。

けれどその中でも。彼は俺に言ってくれた。

「けれど」

「けれど？」

「何とか見つけてみます。その平和な国を」

「ああ、そうしような」

俺達は頷き合った。俺と昔の俺、もつと言えばこれからの彼と今の彼がだ。ゴンドラの中で頷き合った。

青い水の中を進んでいるゴンドラは左右をイタリアの建物に囲まれている。そこからはあまり多くのものは見えない。

だけれど上には空があった。青い空が。それが何処までも澄んでいてだ。果てしないものを見せてくれていた。今の俺達に。

君は僕に似ている 完

2011・2・5

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7139q/>

君は僕に似ている

2011年2月6日23時11分発行